

「乾杯！あなたとサウーヂ！」

Vamos brindar! Chama “Saúde!!” com você!

1 「乾杯」から生まれたエスコラ・ヂ・サンバ

「サウーヂ！！」練習を終えた後、いつもの居酒屋のテーブルを囲んで、わたしたちのサンバチームの打ち上げが始まる。グラスを打ち付け、喉へ運ぶと、昼間流した汗がすっきり引いていくのを感じる。「黄金色に泡立つ、夕風の時」誰かが節をつけて歌う。「昼間の練習よりも長い、夜の練習が本番だよ」チームの先輩が、いたずら顔で笑った。

「エスコラ・ヂ・サンバ『サウーヂ』」は酒と唄とを愛する仲間が集う場所である。その名前になっている「サウーヂ」は、ブラジルで話されているポルトガル語で「乾杯！」の掛け声だということを、かつて教えてもらったことがある。それにはチームの創立にさかのぼる由来があるのだそうだ。

1986年、横浜の盛り場「野毛」の一角にあるジャズ喫茶「YOKOHAMA JAZZ FIRST」で、音楽好きの飲み仲間たちが出会った。ブラジルのサンビスタ「パウリーニョ・ダ・ヴィオラ」の日本公演に触発された彼らは、「俺たちもひとつやってやろう」と、1981年に始まっていた「浅草サンバカーニバル」に出場することを決めた。物好きな仲間たちに声をかけ、初の練習にこぎつけた彼らは、気分高らかに打ち上げの酒場へと向かった。その席で「そういえば浅草に出るには、チーム名が必要だな」と誰かが気付いた。

「“乾杯”ってブラジルでは何て言うんだ？」

「“サウーヂ”だ！」

「よし、それが俺たちのチーム名だ！」

「サウーヂ！！」

こうして彼らは杯を交わし、乾杯の声と共に、サウーヂの歴史は幕を開けた。

これがわたしたちサウーヂに伝わる創立昔話である。練習ごとに行う打ち上げの席で、様々な先輩たちから異口同音に聞かされてきた。そうして、自分もまた、今日初めてサウー

デにやってきた新人メンバーに、少し誇らしげに、そんな由来を語っている。「サウーヂっというのは、乾杯って意味なんだけどさ…」

まもなく、酒席を囲んでサンバの即興演奏、パゴーチが始まった。めいめいが打楽器や小さな弦楽器を鳴らし、音の輪が生まれた。歌声がそれに乗っていく。誰もがグラス片手に体を揺らし、心地よさそうにしている。

輪の外側では、それぞれに話し込む人々がいる。自分たちの行く末、未来に向けてどうするか、そんなのを真面目に語る者もいれば、色っぽい話に花が咲き、目じりを下げている者もいる。そうして時々パゴーチの輪に入ったり外れたりしながら、杯を重ねつつ、笑いあっている。

こんないつもの酔っ払いの日々、数年間失われたが、ようやく戻ってきた日常。

多幸福感に満たされながら、早くも少しふらつきつつ、洗面所に立つ。廊下に向かう背中越しに、輪になって話すグループのどれかから、「おめでとう！サウーヂー！！」とひときわ楽しげに唱和する声がある。誰かの誕生日でもあったのだろうか。

喧騒を離れ、ふと我に返ると、昔のことが思い出されてきた。思えば、これまでいろいろなところで「乾杯！」をしてきたなあ。

2 いたるところに乾杯があった

一番古い記憶は何だったろうか。学校にあがる前、どこかで親戚の大きな集まりがあった。大きな畳の広間に長卓が並べられて、子供たちがその間をソワソワ動き回っていた。見たこともない大人たちが、賑やかに再会を喜び合いながら、宴席についた。まもなくビール瓶が人々の間をまわり、コップに満たされた。これは「カンパイ」というものだ、と気づいた自分は、ジュースの瓶を探してあたりを見回した。見つけられず焦っているうちに、知らないおじさんが立ちあがって何やらあいさつし、大人たちは「乾杯！」と声をあげてしまった。自分のグラスは空っぽなのに。なにかすごく楽しいことに出遅れたのに気づいた自分は、声をあげて泣いてしまった。やっと周りの親たちが気付いて、ジュースを配ってもらい、もう一度「カンパイ！」をしてもらった。コップをぶつけ合って、甘い飲みものを口にしたら、やっと涙がおさまって、急におなかがへってきたのだった。

それから、誕生日やクリスマスには、キャンドルを立てたケーキを囲んで、家族で乾杯をした。クリスマスには、大人が飲むのと同じ、瓶に入っていて、ポンと音を立てて栓が飛び出す、泡の出る飲み物ももらった。脚のついたグラスにそれを入れてもらい、歌を歌って乾杯すると、並べられたごちそうと、サンタさんがくれるプレゼントのことが楽しみすぎて、大はしゃぎしてしまうのだった。

自分が「乾杯！」の発声をしたのは、酒が飲めるようになって間もなく、学園祭の打ち上げだった。入っていたサークルで、学園祭企画のリーダーだった自分は、初めて大勢の人と一っしょに、催しを作っていくことを経験した。何か難しいことをやりたい気がして、背伸びをして企画を考えた。見ず知らずの「大人の人々」と連絡をとり、それを何とか形にしていく。友人や恋人に励まされながら、何とか当日を迎える。反省はたくさんあるけれど、どうにかやり切ることができた。何日もほとんど寝てなかったけれど、一緒に動いてくれた仲間や先輩後輩に感謝を伝えたくて、宴席の卓をまわっては、ジョッキをぶつけ合って乾杯した。それからの記憶はない。気が付いたら朝日の差す部室にいて、みんなで雑魚寝していた。

大人になってからも、あちらこちらで、乾杯しながら生きてきた。びっくりさせるような仕事をやりたかった。縁を作ろうと交流の席に顔を出し、面白そうな人を見つけては、グラス片手に話を聞いた。顔を覚えてもらおうと、昼間ビジネスの連絡をしても話が通じやすいし、あの人とあの人を会わせたら、面白いことになるかも！と、どんどん仲間が増えていくのだった。

それでも上手くいかないときは、気の置けない同期との一杯が気晴らしになった。残業を終えて頭がぼうっとする。もう遅いのに、それでも今日の打ち上げだ！とばかりにいつもの店に繰り出す。大至急で飲み物をたのみ、ジョッキをぶつけ合う。頭の固い上司や理不尽な客の言い分をくさしながら、終電を気にしつつピッチを上げたものだ。

夢を追って遠くに旅立つ友人を送ったのも、あの頃だった。一番気を許せる友が、簡単には会えない場所に向かっていく。盛大に送別しようと、出発の前夜、良く通ったあの店に仲間たちが全員集合した。自分の道を切り開いてゆく友の勇気を頼もしく感じながら、今までの楽しい日々を思い、前途の無事を願って、とびきり力強く杯を掲げた。

そういえばあの人は、今どうしているだろう。金曜日の夜には家に遊びに行き、乾杯しては将来の夢を語り合った。記念日には、着飾ってちょっと素敵な店に行き、普段は飲まないような、細長いグラスを掲げた。泡の向こうにお互いの視線が交錯し、甘やかな喜びに包まれる。ずっと一緒にいたいと願っていた。ひたすらに幸せな時だった。

あの頃から時が流れ、今自分には、家族のように親密な時を過ごす、たくさんの仲間がいる。サウヂと出会ってから、人生の過ごし方が変わった。練習とイベントと、次のお楽しみに向けた準備が、毎週末の日常となった。そしてその後には、必ず乾杯が付いてきた。うまくいった日も、何もかもが中途半端で気が落ち着かないままの日も、ともかくも1日が終わると、「今日ほどこの店にする？」と繰り出して、「おつかれ！」「サウヂ！」と杯を交わした。性別も年齢も、肌の色も様々な面々のことが、はじめはよくわからなかったけれども、乾杯を重ねるうちにお互いにわかりあってくる。とびきり愉快的な話で笑わせてくれる

人もいれば、酔いに任せて切々と悩みを吐き出す者もいる。飲み会の席で仲良くなった人とは、バンドを組んだり、連れ立ってイベントに出かけたり。そうしてますますお互いが好きになり、どこにいても一緒に笑いあっているような気分になるのだった。

3 断ち切られた日々、いまふたたびの乾杯

しかし、ここ数年の状況は、こんな心躍る日々に、重い影を落とした。一番はじめは、何もかもが怖くて、家の中に引きこもっていた。SNSで仲間の消息を確かめながら、手持ち無沙汰の時間を過ごした。動画を見ながら、ひとり練習を試みたりもした。役には立つのだけど、何か満たされない。友達と一緒にやる時間が大事だったのだと、それが失われてから気づいた。

「オンライン飲み会やるよ」と声がかかり、喜んで参加した。急速に普及したリモート技術で、久しぶりにメンバーが顔を合わせる。互いの無事を喜びあい、区切られた画面の中で「サウーチ！」を交わす。人とのつながりに飢えていたあの頃には、それは貴重なものだったけれど、どこかで満たされないものでもあった。トークを順番に回しあうような、リアルな飲み会と違った妙な間がある。音声が錯綜して、誰がしゃべっているのかわからなくなるので、いちいち笑いを止めて、次の発言を待つ。会社の会議には向いているのかもしれないけど、何度か続けるうちに飽きてしまった。

窓を開け放ち、恐る恐る集まって再びみんな練習を始めたときも、当然ながら夜の乾杯はお預けだった。2メートルの距離をとって仲間と整列し、以前のように叩き踊ろうと試みる。表情で必死にコミュニケーションをとろうと努める。お互いの目線が合って、「やればできるじゃん」とコンタクトできた時はうれしかった。けれども、この嬉しさを酒場で思う存分に語り合いたいのに、夕方になればマスクをしっかりとつけて、家路に向かうことしかできなかった。

もう少し世の中と自分がたるんできて、川べりでこっそりと飲み交わすようになって、不謹慎だけど、何よりも嬉しかった。飲み物を持ち寄って、何となく向かい合わないように気を遣いながら「サウーチ！」と唱えあった。飲み物を口に運ぶたびに、マスクをずらしたり直したりするのがもどかしい。横に並んだ仲間と、近頃会わなくなってしまったメンバーの消息を語り合った。いつになったら、全員で乾杯できるのかなあ。

そしてその時はやってきた。4年ぶりにやってきた「浅草サンバカーニバル『縮小版』」。初めて浅草に臨むメンバーや、久しぶりに顔を合わせるメンバーが、川べりのアトリエに続々と集まってくる。「みんな昔のこと忘れちゃってるから、まずは思い出していこうね」とは言うものの、お預けされていた散歩に連れ出してもらったワンコみたいに、心が

高ぶるのを抑えられない。でっかくて楽しいものを作る夢がどんどん膨らんでいって、それはそれは大変だったけれども、やっぱりここ何年も味わえなかった喜びだった。そうして臨んだ浅草。短いパレードコースの沿道を埋め尽くす、たくさんの人・人・人。顔見知りのライバルたちが、この日を待ち望んでいた気持ちを共にし、満面の笑みで応援してくれる。4年ぶりのデスフィーレは、再び全力で走り出す毎々が戻ってきたことを、実感させてくれるものだった。

浅草が終わった夜、横浜に戻ってきて、いつもの居酒屋で打上げの乾杯をした。旧いメンバーや、初めて浅草に出たメンバーも、パレードをやり終えた興奮で、顔を赤くしている。浅草に向けた作業や練習は、やっぱり大変で、意見の違いに音をあげそうになることもあった。それでも、チームカラーの緑とピンクで彩った衣装を身に着けたくて、眠くても頑張った。色々な苦労や、励ましあってやりぬいた仲間への感謝、久しぶりに出た浅草で感じた興奮、そんなものが一時に押し寄せてきて、うわーっと涙目になりながら、何度も輪をたがえては乾杯をした。「サウーヂ！」そう呼び交わすことが、お互いへの感謝を伝え、讃えあう、最良の方法だと感じていたから。

お世話になった人々とグラスをぶつけるたびに、一緒に過ごした日々が思い出されてくる。一日の練習や作業が終わるたびに交わした、小さな乾杯。再び始まった浅草をめざして、一年無事にやり切ったことを讃えあう、今日の乾杯。あるいは、こうして家族のように親密に過ごしてきた、何年もの時を振り返って交わす乾杯。小さな乾杯が重なって、1年がめぐる。人生は節目ごとの乾杯に刻まれ、様々な乾杯に彩られていく。

4 あなたとサウーヂ！浅草で乾杯！

宴席へと戻り、馴染みの面々が話し込んでいる卓を見つけ、ジョッキを片手に輪に交じる。中座している間に、わたしの中で愉しい考えがふくらんでいた。「乾杯＝サウーヂ」の掛け声のもとに生まれたサウーヂ。仲間が集い、あらゆる瞬間に乾杯しながら、ここまでやってきた。このメンバーと、乾杯をテーマに浅草で歌い踊り叩き、それを肴に、思う存分乾杯する1年をおくれたら、何て幸せなんだろう？

「今すごくいいこと思いついちゃったのだけど、聞いてくれる？来年の浅草の話なんだけどね…」愉快な思いつきは、たちまち輪になった仲間にも共有され、喝采を浴びた。誰かがさっそくおかしな衣装や振付を考案し、それをもとにまた笑いが生まれる。本気でやっちゃおうかな？

馴染みのバーへと席を移し、「乾杯」をめぐる湧き上がる想いを書きつけてみた。

はじめに、乾杯とは何だろう？と考えてみる。乾杯はひとりではできないものだ。宴の始まりを告げるとともに、これから一緒に楽しい時間を過ごそうという、その決意を確認しあうセレモニーだ。

そうして杯を突き合わせれば、他では得られない親密な感情が生まれる。新しい仲間を迎えてサウーヂ！久しぶりの再会を喜んでサウーヂ！乾杯から生まれる魔法が、人々を結びつけていく。

乾杯の声と共に、共に歩んできた日々を振り返り、お互いに助け合ってきたことへの感謝が飛び交う。これまでに成し遂げてきたことを喜び合い、讃えあう。そしてこれからも、ここに集った仲間が健康で幸福に過ごし、この友情や愛が永遠に続くようにと願って、また乾杯する。

誕生日や新年の始まりなど、特別な時にも乾杯は欠かせない。節目節目の乾杯は、杯を捧げる人に向けて感謝の気持ちを伝え、新たなる門出を祝福する大事な儀式になっている。

がんばった人に対してねぎらいの気持ちを伝えるのにも、やっぱり乾杯が一番だ。来年の夏にはオリンピックがある。素晴らしいプレーでわたしたちを驚かせてくれる選手たちに、心からの乾杯で感謝を伝えたい。

結婚して子供が生まれたりしたら、毎日が乾杯ラッシュだ。愛するあなたと一日過ごせてありがとう。健やかに育ってくれてありがとう。人生に記念日は多いほうが良い。小さな手にコップを持ったあなたに、乾杯する喜びを教えてあげたい。

年を取って人生の終わりにも、やっぱり乾杯するだろう。できれば病院のベッドでも、とびきりの一杯を片手に、お見送りに来てくれた人と乾杯したい（そしてストローで吸い込むのだ）。願わくば、先に旅立った家族や仲間と、乾杯できるあの世があってほしい。

これからも乾杯とともに、一生を過ごしたい。思えば、こうして乾杯できるのも、自分と周りの人々が平和に健康に暮らしているからだ。だから昔の人は、この幸せが続くことを願って、「健康＝サウーヂ」を、乾杯の言葉に選んだのだろう。

とはいえ、世界を覆う悲惨な憎しみの応酬を、酒や乾杯で何とかできると思うほどには、わたしも脳に酒が回ってはいない。辛いことは辛いこととして、時が解決してくれるよう、祈るしかない。ただ、お互いの幸せを願うささやかな行為である乾杯が、鎖となって世界中につながっていったら、悲しい争いが少しでも早く、ましなほうに向かうのではないかと願うばかりだ。

わたしたちは、自分の手の届く範囲でしか乾杯できない。その中で杯を交わし、祝福を交わす。どこまでその手を、遠くまで伸ばしていけるだろうか？

またわたしたちは、自分に与えられた時間の中でしか乾杯できない。その限りある時の中で、どれだけともに乾杯できるだろうか？

人生の中で、誰と、どこで乾杯するか？これって、宴会にも似ている。乾杯と共に宴が始まり、様々な輪が生まれる中で、どこの輪に交じって楽しんでもよい。思い切ってグラス片手に遠くの輪に移って、知らない人に「乾杯！」と飛び込んでいけば、決して悪いようにはならない。乾杯は、それを交わす人々に向けて心を開き、ともに幸せな時間をすごしたいという、世界共通の合図だから。

宴はいつか終わる。人生もまた同じ。所詮一夜の夢、ジョッキについた泡みたいなものだ。でもその中で、限りある時間を少しでも楽しく、心躍るものにしていききたいという決意が、このグラスを持った右手に込められている。

カーニバルもまた同じこと。1年の中でたった1日、それもわずかな時間だ。それでも、わたしたちは毎年そこに向けて集まってくる。舞台を整えてくれる浅草の街の人々や、サンバを愛する多くのサンビスタたち、浅草のサンバを楽しみにやってくる大勢の観衆とともに、カーニバルという宴を、一緒に楽しむために。スタートの合図こそが、乾杯の発声だ。この短い時間の中で、1年間蓄えてきたものを出し尽くし、ふるえるような喜びを魂から発し、そこに集った人々と共振させる。隊列が進むにつれ、沿道で待ち受ける人々と、わたしたちは次々と乾杯を交わす。ともにここに在ることを喜び合い、生きていて良かったね！というお互いの思いを交歓させる。バテリアの響き、ダンスからほとぼしるヴァイブ、沿道に響く歌声こそが、わたしたちが発する乾杯の叫びだ。その声が少しでも遠くに届くようにと、力強く歌う。

わたしたちの乾杯の歌声が、遠く海を渡り、地球の裏側、マンゲイラの丘に集う人々にも届いてほしい。あなた方からいただいたサンバの種子を、わたしたちが受け継ぎ、育ててきた。ともに乾杯しながら、その実りを味わってもらえたら嬉しい。

また、歌声のわずかでも、世界のいたるところにいる、苦しむ人々に届いてほしいと願う。わたしたちは平和な川岸のこちら側で、乾杯を楽しんでいる。けれども、内向きの輪になって乾杯しているのではない。川べりに立って、あなた方に届くようにと、杯を持った手を伸ばしている。辛い境遇にある、あなたのことを気にかけている。一刻も早く、平和のもとに、（お酒でもそうでなくても）互いの手に持った杯を、交わせるよう願っている。

わたしたちは浅草で乾杯する。仲間に向けて、観衆に向けて、世界に向けて。このカーニバルこそが、一夜の宴であり、人生だ。今、ここで、共に生きていることを喜びあおう。共に過ごす時間を、心躍るものにしよう。その決意を杯に満たし、力強く掲げ、見つめあってさけぼう！

乾杯！あなたとサウーヂ！